

# スポーツ in TOYAMA なかま

第381号  
2021年2月1日  
発行者 新日本スポーツ連盟  
富山県連盟  
発行責任者 荒井英治  
〒930-0884  
富山市五福末広町 834-12  
山商ハイツ28 202号室

今年は、年明け早々、昨年末からのコロナウィルス感染拡大が継続したままで、そのうえ日本海側では豪雪で交通マヒや落雪事故が多発し、前途多難を予感させる暗い1月でした。

1月中の登山・ハイキングの活動はコロナウィルス感染危惧と深い積雪のために、中止や延期が相次ぎ、色々と苦勞があったようです。

今月号は三島野スポーツクラブが1月24日に実施した呉羽山雪上ウォークの感想文を掲載します。

## 雨の中の雪上ウォークも、仲間と歩けば また楽し

三島野スポーツクラブ E.A



当初、1月17日の予定だったが、豪雪のため1週間延期しての今日の実施となった。

朝の気象予報では午前中いっぱい小雨とのことで、雨の中の、立山連峰も眺められない、あまり楽しくない山行かと、リーダーの身でありながら、できるものなら再度延期したいくらい、モチベーションが低かった。

私も含めて、どの参加者も呉羽山雪上ウォークのイメージは「歩きやすい雪の遊歩道を白銀の立山連峰を見ながらルンルン気分で歩くこと」だと予想されたので、それと真逆の条件に、何か皆さんに申し

訳ない気がしていた。まさか2回も延期はないだろう、と仕方なしに実施したのが本当のところでした。

集合場所の薬勝寺Pに集合時間の午前8時に10分程早めに行くと既に10人の参加者の大方が小雨の中を車外で待っていて、「あれっ」と思った。モチベーションが低いのは自分だけで他の人はそれほどでもないのかと、少し気持ちが上向いてきた。

全員そろったところで出発。コロナウィルス感染のリスクを少しでも下げるために、車の窓を少し開けて、暖房もエアコンではなくて換気モード暖房でお願いして呉羽山へ向かった。旧8号線沿いの駐車場

に着くと、雨具を装着し、カンジキを履いて歩きだす。2週間前の積雪もいづらか締まってはいるがカンジキでも沈んで歩きにくい。幸いに、以前に何人か歩いているようで、踏み跡を辿っていただけなので歩きやすくなっていた。

しばらく急な坂道を登って行くと直ぐに七面堂に着く。案内板には七面堂と長久院のことが書かれていて、そこは富山藩の祈禱所となっていて毎夜、常夜燈が灯されていて、多くの参拝客で賑わっていたとのこと。そこから少し上に行くと稲荷神社があるが、横目に見ながら先を急ぐ。尾根沿いの道を雪の深みにハマったりしながら歩いていると、雨も上がっているのに気づく。視界は少し良くなっているが、富山市街は神通川より東側はまったく見えない。でも雨が止んだだけでも儲けもので、気持ちも若干明るくなってきた。

途中、遊歩道を切って走っているアスファルト舗装の車道を横切って歩いていくと高圧線鉄塔や電波塔が見えてきて、だんだん目的の白鳥城址に近づいているのが分かる。

コンクリート造りの展望台に到着すると少し休憩。東の方を眺めると神通川の向こうの高層ビルが見えて、少しづつ視界が良くなっているのが分かる。ここから白鳥城址までは一登りなので、まず白鳥城址へ登ってきてからランチタイムとすることに。

最後の急な坂道を登り切ると平坦な頂上に着く。そこで全員そろって記念写真を撮る。

立山連峰は見えず残念だが、それなりに達成感があって、来て良かったと思った。展望台まで戻って昼食を食べる。帰りはきれいに除雪された車道を歩いて車のところまで戻る

久しぶりの山歩きに、心地よい疲れがあって「やっぱり山歩きはいいもんだ」と感じた。

呉羽山がどうして出来たかについて、うんちくを語れなかったのは少し心残りではあったが。



## スポーツ連盟とやまの行事予定

5月23日(日)	救急救命講習会
6月中旬	反核平和マラソン
11月21日(日)	交流ウォーキング
12月5日(日)午後2時から	第41期定期総会

## 各クラブの予定

### 富山ハイキングクラブ

2月7日(日)	小佐波御前山
2月14日(日)	二上山・大師ヶ岳
2月20日(土)	牛岳
2月28日(日)	眼目の寺と櫛形山
3月7日(日)	阿別当山
3月14日(日)	二子山
3月20日(土・祝)	大乘悟山

### 三島野スポーツクラブ

2月7日(日)	頼成の森(かんじきハイク)
2月21日(日)	尖山
3月7日(日)	雪上訓練、八乙女山
3月13日(土)	小佐波御前山

### 富山ウォーキングクラブ

2月は休止	
3月は実施する	日時・場所は未定

## 編集雑記

去年は家族の病もあって、山歩きもスキーもほとんど自粛していて、運動と言えば、村内の農道や田圃の畦道を早朝の薄明かりの中、小1時間ほどぶらぶら歩く程度だった。手持ちのテレマークスキーも2年程段ボールのケースに入ったままだった。1月に入って腰の高さまでの積雪に、気持ちが高まって、久しぶりに村中の田圃や丘陵を歩いてみた。10日ばかり前に積もった深い雪は適度に圧雪状態で、スイスイと前に滑ってくれる。人間も、鳥の姿さえも見当たらない、自分ひとりしかいないところを漫然とろろついていると、脳裏には様々な記憶が浮かんで消え、また別の記憶が浮かんでくる。そこに出てくるのはキツネやオコジョ、蛇やカラス、そして印象深い人の声の響きと面影。それら全ての生命体はもう既に無機物となって霧散し、構成原子は、別の生命体に再利用されているか、大気圏を浮遊しているかだろう。

それらの面々の中でも、思い出すと懐かしさと寂しさがこみ上げてくるのは新潟のH・Rという友人だった。2年前の春4月の初めに自死した。H・Rとは県内の大学でたまたま同じ学科のクラスメートだったので、時々、彼の下宿を訪ねては話をする程度で、それほど親しくはなかった。彼は高校の教師、自分は地元の役場職員で、卒業後は、ほとんど音信も無く、数年に1回、電話で短い近況報告をする程度の疎遠な間柄だった。H・Rと再び交流をもつようになったきっかけは2004年10月23日に起きたM6.8の新潟中越地震だった。ニュースで地震のことを知った時、ふと彼のことが気になって地震の後片付けのボランティア活動にでも役立ちたいと電話した。返ってきた答えが「地震のボランティアもいいが、俺の引っ越しを手伝ってくれないか」だった。良く事情が呑み込めぬまま2、3日後に、新潟の小千谷市に向かった。

婿養子として入った家から、新たに借りた小さな一軒の中古の家へ彼ひとり分の家財道具一式を運ぶのが仕事だった。荷物を運び終わってから、詳しい事情を聞かせてもらった。

……………その後まもなく、彼は教師をやめ、離婚し、2人の子供たちに会うことも難しくなった。

3回程転居し、新潟市内のアパートが最後の住処となった。…………… H・Rと互いの身の上で起こったことを話すのはその後のことだった。それまで誰にも話したことがない、他人には知られたくないことまで忌憚なく話すことが出来る相手として互い認めていたから。私にとっては、封印していた思いを聞いてくれる人がいることはすごく慰めだった。政治や哲学や物理科学など他の人に話せば、距離を置かれるような話題までも安心して話せる、そんな友人がいることがどれほど有難いことか、いなくなってそのことが解る。亡くなる前の3月、何回も電話しても応答がなく、不吉な予感がしたが、まさかそんなことは起きないだろうと理由もなしに考えていた。そして4月7日頃、H・Rからの電話が鳴った。

「もしもし。どうした風邪でも引いたか、声が少し違うようだけど」…「もしもし、アライさんでしょうか。」…「はい、荒井です。Hくんは？」…「Rの兄です。…Rは亡くなりました。」……………

「そうですか…」 それから3ヶ月後に糸魚川にある彼の実家を訪ね、毛筆で書かれた遺書を読ませてもらった。覚悟の上の死であることがよく解る、理路整然、落ち着いた文面だった。歳の離れた弟の突然の死に未だに訳が分からない様子のお兄さん。帰り際に、何処か喫茶店で、話ませんかと言われたが断ってしまった。彼からお兄さんとの関係をよく聞いていたので。H・Rから学んだことは、自分にうそをつかないこと。 Hよ、夢でもいいから会いに来い。